2015 年度
非文字資料研究センター

第 2 回公開研究会

「台湾でなぜ神社の復興が見られるのか？
中国・南京神社の社殿はなぜ壊されなかったのか？」

日　　時：2016 年 2 月 27 日（土）13:00 ～ 17:30
会　　場：神奈川大学横浜キャンパス　1 号館 308 会議室
開会挨拶：田上　繁（神奈川大学日本常民研究所所長）
趣旨説明：中島三千男（神奈川大学非文字資料センター客員研究員）
総合司会：津田良樹（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
講　　演：武知正晃（台湾首府大学）
「台湾における日本時代の建築物を見る眼差し－近年なぜ神社の復興が目立つのか」
李　百浩（中国・東南大学建築学院）
「日本の敗戦後における旧南京神社の歩み－なぜ南京で社殿が壊されなかったのか」
コメンテーター：
蔡　錦堂（国立台湾師範大学）
上水流久彦（県立広島大学）

開催の趣旨

神奈川大学非文字資料研究センター主催の 2015 年度第 2 回公開研究会（海外神社班担当）が、2016 年 2 月 27 日（土）13 時から 17 時 30 分まで、神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308 会議室で行われ、90 名近くの出席者が会場を埋めた。

本研究会の開催の趣旨は以下のようなものである。

近年、海外神社が建てられた地域で神社の再建、復興、活用（跡地を含めて）が目立つようになりました。この流れは、早くは 1980 年代に旧南洋群島（現パラオ共和国、北マリアナ諸島連邦等）に建てられた神社（サイパンの彩帆香取神社、パラオの南洋神社など）に始まりますが、最近では旧樺太（現ロシアサハリン、トマリオルの泊居神社等）、台湾（屏東県高士村のクスクス社等）においても目立つようになっております。

海外神社（跡地）の研究は、戦前の海外神社そのものの研究にとって役に立つものですが、それとともに、その国、地域の戦後の歩み、そして現在の姿を浮き彫りにするものであることは、我々の研究で明らかにしてきたことです。

今回の公開研究会開催の趣旨は、

①今日における台湾での神社再建、復興、活用の動きは、今日の台湾のどのような事情を背景にしたものであるかを読み解きたいということです。併せて、それは旧南洋群島や旧樺太のそれとどのような共通点、違いがあるのかを明らかにすること。

公開研究会の様子

②他方、中国では東北部（旧満州地域）を除いて、神社の遺構が残っているのは我々の調査の範囲では非常に少ない状況です（旧新京、現長春の建国忠霊廟、旧関東州、現旅順の関東神宮など）。そうした中で、南京神社の場合、その遺構（本殿、拝殿、社務所）がほぼそのまま残り、文化財として登録されるとともに、現在では民間会社などに利用されております。中国では、戦後すぐの破壊や自然崩壊、さらには残った物も文化大革命期に壊されたものも多いといわれています。こうした中で、また、とりわけ「南京大虐殺紀念館」があり、また昨年 12 月にはその分館として中国で初の「慰安婦記念館」が建てられた南京で、どのような経過、論争を経て旧南京神社の社殿は壊されずに残って、今日にいたっているのか。このことを明らかにすることでした。

以上のような問題意識の下に、歴史学、建築学、文化人類学の立場から総合的に読み解いていこうというものであった。

今回の報告、コメントは『非文字資料研究』13 号に全文収録されるので、ここでは各報告者のレジュメにそって主な章立てだけ報告しておく。

講演

武知正晃氏

はじめに／本報告にあたっての視点／日本統治時代への意識／現代台湾での日本式建築・神社へのイメージ／ネット上の郷土探し・神社参拝／神社再建をめぐる言説／近年の神社の復元と言う現状について／おわりに

武知正晃氏

李　百浩氏

前言／南京神社計画以前／計画及び建設時期／戦後・中華民国時期／中華人民共和国時期／現在（現状実測図、南京神社境内の復元）／結語

李　百浩氏

コメント（2 講演に対するコメントをいただいた上、独自の追加報告をいただいた）

蔡　錦堂氏「戦後台湾における神社処分について」

神社の接収と処分（戦後初期 1945 年～ 1960 年）／戦後の新聞記事から見た神社に対する処分

蔡　錦堂氏

上水流久彦氏

複数地域で建築物を研究する意義／台湾における建築物の現在／植民地期の分析枠組み

上水流久彦氏

最後に討論が行われたが、主に昨年（2015 年）、台湾南部屏東県高士村に地元民の要望を受けた日本人神職（佐藤健一氏）によって再建されたクスクス社の評価をめぐるものであった。

津田良樹氏（総合司会者）と中島三千男氏（趣旨説明者）

（文責：中島三千男）